



「あっ♡はあっ♡んっっはあ♡
こんな感じでどおだろか、プロデューサーっ♡」

「んっ、もう少し奥まで挿したいなあっっ
ひなたの膣奥は絶品だからさあ」

「では微力ながら私も手で腰を押し込み
動きを支援いたしましょうっ」

「ありがとねえ、絢さん」

「んっ♡奥までっ♡深く…っ♡
んんんっ♡こんなっ♡
んふう♡っ感じがいい♡♡」

「おほおっっっっ！いいねいいねえ！
奥のいろいろとこまで
バッチリ入ってるよお！」



「それにしても
アイドルを誑かしてセックス三昧とは
良いご身分ですね」

「いやいや、これが俺の
プロデュース方法なんだってば」

「これのどこがプロデュースだと
言うのですか」

「あつ♡あはつ♡別に嘘でもっ♡
あたしは気にしないよおっ♡
んっ♡こんなに気持ちいいことっ♡
あつ♡あつ♡んはあつ♡
止めるのもったいないべさっ♡」

「ひなたは素直でいい子だなあ〜！
性格もカラダも俺好みに
成長してくれたよ……！」

「細もこんなにデカパイになっちゃって！
なんだかんだ『こっちの才能』も
あったんじゃないかあ？」

「貴方が毎日飽きもせず揉みまさぐるからです……っ♡
それに……その……一度、妊娠も経てますから……っ♡」

「のほほほ！ そーだったねえ〜……！」



「ひなたのおまんこの仕上がり具合も良いよ！
こっちも一回『墮ろじた』のが効いてるのかなあ？」

「んっ…！♡それ、はあ…っ♡」

「おっ！ 良い反応！
締めまりがよりキツキツになったねえ！」

「うううう…っ♡
そつたらこと言われて
感じちゃダメなのに…っ♡
ダメなのに…お胎が疼いて…っ♡」

「はっ…ん…！♡んふう！♡ふうっ！♡」

「んおほっ！ 腰つき激しくなってるね！？
おっ！？ おおっ！？」

「おっほ！ おおお…っ！ すっ！
ひなたしゅごひいよお…！」

「私や伊吹さんだけでなく
純朴な木下さんにまで
昏い快楽を教え込むとは…♡
本当に最低な方です、貴方は…♡」



「のほっ! のほお!」これっ、ひなた欲しがってる!?!
中にザーメン欲じがってるよねえ!?!
これじゃまたデキちゃうよお!?!」

ぞくん

「いいっ♡デキてもいいっ♡
今っ♡今気持ちよくなりたからっ♡
プロデューサーのっ精子中につ♡
中に生精子ほしいよおっ♡」

「木下さん、貴女はそこまで...っ♡」

「いいんだねえ!?!
またお医者さんにお世話になっても...!!
それよりもザーメンを!
生中出しを選んじやうのお!?!」

「中出し!♡絶対中出しっ!♡」

「のほほ! よおし! じゃあ生中だあつ!
妊娠したらお医者さんに
ダメにしてもらいに行こうねえっ!」

「うんっ!♡そうすっからっ!♡
精子っ!♡精子中につ!♡くださいっ!♡」



「のっほおおおお!!
出る出る出るううう!!」

ビクッ

「はひいっ!♥♥♥イクっ!♥♥♥イクっ!♥♥♥
イツツツくうううあああああっ!♥♥♥」

「孕ます!! ひなた!!
また孕ますぞお!!」

「あああっ!♥♥♥デキちやうう!♥♥♥
ダメにしちやう子っ!♥♥♥またっ!♥♥♥
デキちやううううう!♥♥♥」

(ああ…っ♥
木下さん、憚らずに嬌声をあげて…♥
とても気持ちよさそうです…♥)

ゴニョニョ

ゴニョニョ

ゴニョニョ

ビクッ

ハハハ

「あ〜〜〜…最っ高、更新〜っ!〜っ!
動きもおまんこも随分巧くなったぞお、ひなた〜!」

ぞくん♡

「んはっ…♡はあ…っ♡ふやあ…♡
ありがとさんです…っ♡」

「あたしもすんごく…♡
気持ちがよくったべさあ…っ♡
やつぱし、生中出し好きだわあっ…♡」

「この分では今日にでも
木下さんと貴方との赤子が
できそうですね…♡」

「大丈夫大丈夫!
君ら一人二人堕ろす金くらい
楽勝で稼いでるから」

「また貴方はそのような物言いを…♡」

「まったく…
貴方はアイドルを
なんだと思っているのですか…♡」



「おっほ！ おっ！ おおっ！ いいねえ！
キツキツのひなたマンコとはまた違った味わいだあ！」

「んっっ♥んっっはあっ♥
それは私の膣がゆるゆるで締りのない粗製だとしても…っっ」

「いいいやいや、そーじゃねえっての…！
ぶっちゃけすんこい名器つすわあ！」

「んんっ…♥♥♥ そっ…、そっ…ですか…っ♥♥♥」

「細さんはあたしと違って
カラダも大人っぽいから
ちよっこし妬ましいくらいだべさ♥」

ずんずん

「これはっ…その…っ…♥
散々プロデューサーが弄んだ結果で…っ♥」

「だからこれが俺流の
プロデュース、プロデュースう！」

「気持ちよくてえっちなプロデュースだねえ♥」

「あっ…ん…♥
気持ちいいのはっ…認めますけども…♥」

「おっほ！ おっ！ おおっ！ いいねえ〜！
キツキツのひなたマンコとはまた違った味わいだあ！」

「んっっ♥んっ…はあっ♥
それは私の膣がゆるゆるで締りのない粗製だとしても…っ？」

「いいいやいや、そーじゃねえっの…！
ぶっちやけすんこい名器つすわあー！」

「んっっ…♥♥♥ そっ…、そっ…ですか…っ♥♥♥」

「細さんはあたしと違って
カラダも大人っぽいから
ちよっこし妬ましいくらいだべさ♥」

にゅる

「これはっ…その…っ…♥
散々プロデューサーが弄んだ結果で…っ♥」

「だからこれが俺流の
プロデュース、プロデュースう！」

「気持ちよくてえっちなプロデュースだねえ♥」

「あっ…ん…♥
気持ちいいのはっ…認めますけども…♥」

「ん…っ♡ふう…っ♡まったく貴方ときたら♡
私や木下さんのようになっ♡んんっ♡
上京して右も左も分からぬ女子を唆し
手籠めにするのですからっ…♡
んっ…あん…っ♡
プロデューサーが聞いてあきれます…っ♡」

「なんでかちゃんと
アイドルもやれてるけんども…
ほんと、悪い大人だべさ♡」

「ひひっ！
どんだけ罵られても効かねえわあ！
何言われたって結局
こーして売れっ子アイドルと
生ハメできてっしなあ！」

「貴方という人は…♡」

「貴方のせいであ…♡
おちんぼ無しではまますならぬ性にな
ってしまっただですよ…っ♡」

「これはもう責任とつてもわらわねば♡」

「ああ、そーゆーのパス！ 責任とか知らねっ」

「っ…♡ん…ふう…っ♡
最低っ…ですね、本当にっ…♡」

ズドッ

「ん…っ♡ふう…っ♡まったく貴方ときたら♡
私や木下さんのようになっ♡んんっ♡
上京して右も左も分からぬ女子を唆し
手籠めにするのですからっ…♡
んっ…あん…っ♡
プロデューサーが聞いてあきれます…っ♡」

「ひひっ！
どんだけ罵られても効かねえわあ！
何言われたって結局
こーして売れっ子アイドルと
生ハメできてっしなあ！」

「貴方という人は…♡」

にゅる

「貴方のせいであ…♡
おちんぼ無しではままならぬ性にな
ってしまっただですよ…っ♡」

「これはもう責任とつてもわらわねば♡」

「ああ、そーゆーのパス！ 責任とか知らねっ」

「っ…♡ん…ふう…っ♡
最低っ…ですね、本当にっ…♡」

「のほほほっ！ 最低でこめんねえ！
でもそんな最低の俺に初めての『お胎』
使わせてくれたは誰だったっけええっ？」

「うっっ…♡んっふうう…っ♡それはっ…♡」

「胎に変な彫りモノまで入れる必要あったのかい？
撮影の時に早坂さん、随分驚いてたけども♡」

「修正加工で消してもらえからセーフっ！」

「セーフではありませんっ♡んくう…っ♡
どれだけきまりが悪かったことか…っ♡」

「ふっ」

「あたし達、早坂さんにもう
『そういう女』だって思われてるんだろか♡」

「くっ…んんっ！♡ふうう…っ！♡
そんなっ…、そんなことはっ…♡」

「おっ！？ めほっ！？
おやおやうっ！？ 変だねえっ！？
締まりが強まったぞおっ！？」

「っっ…♡」

「のほほほっ！ 最低でこめんねえ！
でもそんな最低の俺に初めての『お胎』
使わせてくれたは誰だったつけええっ？」

「うっっ…♡んっふうう…っ♡それはっ…♡」

「胎に変な彫りモノまで入れる必要あったのかい？♡
撮影の時に早坂さん、随分驚いてたけども♡」

「修正加工で消してもらえからセーフっ！」

「セーフではありませんっ♡んくう…っ♡
とれだけきまりが悪かったことか…っ♡」

ズ
ン
ッ

「あたし達、早坂さんにもう
『そういう女』だって思われてるんだろか♡」

「くっ…んんっ！♡ふうう…っ！♡
そんなっ…、そんなことはっ…！♡」

「おっ！？ めほっ！？
おやおやうっ！？ 変だねえっ！？
締まりが強まったぞおっ！？」

「っっ…！♡」

「細い、また妊娠しとくか!?!」
「二度目の妊娠、こころでしとこーじゃないの!」

「あつ!♥ あああ…っ!♥
またつまた妊娠、させるですか…っ!?!♥
墮ろさせておいて、またっ!♥
お胎を使うというのですかっ!?!♥」

「こりや同じ時期にデキそうだねえ♥
お仕事あつから産むわけにはいかなえし
細さん、あたしと一緒に病院いこっか♥」

「だ、墮胎前提の妊娠っ…なんてっ!♥
そんな倫理に悖ることっ…するのは…っ!♥」

「でもねえ、プロデューサーの生中出し
すこしく気持ちよかったよあつ♥
細さんもアレ、嫌いじゃないっしよあつ♥」

ぞくぞく

「ああああ…っ!♥ そんなっ…!♥
快感を得る為のっ!♥ それだけの妊娠なんてっ!♥
またもそんな不道德な妊娠を…っ、私は…っ!♥」

「なっ! もう一回孕もうよ、細い!
気持ちよく妊娠しとこー? なっ!?!」

「あつ!♥ んはあつ!♥ 妊娠っ…!♥
また、妊娠…っ!♥ ああああ…!♥
あつ!♥ ああつ!♥ あああああつ!♥」



「いくぞおっ！」

精子受け取れよお、細いいっ!」

「あああっ!♥あああああああっ!♥
んはあああああああああっ!♥♥」

(あっ...♥プロデューサー
とっても気持ちよさそうな
顔してるべさ...♥
細さんの中で出すの
そんなにイイんだねえ...♥)

ビュビュビュ

ビュ

ビュ
ビュ
ビュ
ビュ
ビュ

ビュ

ビュ

ビュ

「妊娠しろ細っ! 妊娠っ!
ガキ孕めよ細いいいいっ!」

「これっ!♥あああっ!♥
妊娠しますっ!♥絶対っ!♥
赤ちゃんっ!♥デキてっ!♥
っはあああああっ!♥♥♥」

「ふいっっっ！ 出た出た、スツキリいっっっ！」

「お疲れさんです♥
紬さんのおまんこ、気持ちよかったかい♥」

「最高確認したわあ！ ファンにも教えてやりたいね、
『紬まんこは超名器』だってさあ……！」

「そんなにっ……よいの、ですか……っ♥」

「ま、使えるのも孕ませられるのも
俺だけなんだけどねえ！」

「しかしファンの方に
膣の具合を知られるなどっ……っ♥
そんなことがあつては……っ♥♥」

ア
ト
オ
オ

ぞくぞく

「んっ……？ またまんこが反応を……っ？
まさか想像したら疼いちゃったかあ？」

「なっ……っ♥
そっ、そのようなことは……っ♥」

「ふふふっ 紬さんも好きもんだねえ♥」

「二つめの彫り物あと
いっそ全部カミングアウトしてみるから？」

「で、できるはずではないですか……っ♥」

「うっう……っ♥
貴方も、木下さんも……っ
からかわないでくださいっ……っ♥」























































